

ト 飛行機に乗った
ドンキホーテ 第37回
私のスペイン定年留学11

仲間たちの 人生模様

1月28日、火曜日。期末試験が行われました。昨年10月から4カ月間の勉強の総決算です。とはいえ、今更、試験のための準備などはあまり意味がない。これまでの培ってきた総合力を反映する以外にないからです。ありがたいことに、試験内容にも、みんなのこれまでの努力を認めよう、評価しよう、との配慮が見られました。文法担当のラファエルははっきりと言ったのです。

「ボク個人としては、こうした試験にあまり賛成ではないんだ。試験をしなくてもみんなの実力、努力は毎日の授業でボクが一番わかっている。でも、学校のシステムとして、形としてでも試験をしないと困る、と言うんだ。ま、すでに『全員が及第』は決まっているから、気を楽にして、学んだものを存分に発揮してや!」

会話の試験は、テープに録音された新聞記者のインタビューの内容聴解と、作文でした。作文のテーマは5種類、誰でもが自分の得意とするテーマを選べるようになっていました。試験が終了すると、クラスを代表してスウェーデンのマリーナが、お世話になったラファエルとインマに記念品を贈呈しました。セビリア焼きの料理皿。皆で心ばかりのお金を集め買ってきたものでした。

「素晴らしい生徒たちに恵まれ、楽しく授業を続けることができた。これから後期のコースを取る人もいるし、別の道に進む人もいと聞いている。どこの国、どこに行っても、健康にだけは留意して頑張つてや。心温まる記念品、本当にありがとう。心なしか目を潤したラファエルの言葉でした。

続いて、全員で母国の住所や電話番号、Eメールアドレスの交換をすると、大学近くにあるカフェテリアで打ち上げの昼食会をもつことになりました。

午後2時過ぎ。少し前までヨーロッパ全体を襲っていた寒波も消え、マラガにコスタ・デル・ソル本来の冬が戻っています。真っ青な空。燦爛とふりそそぐ太陽。摂氏18度。みんな戸外のテーブル席に輪になって座りました。前期コースが始まった当初には13人いた仲間も、昨年末には5人が母国に帰り、今は8人と減ってしまいました。少人数になっただけ、お互いの親密度も増えています。ビール、サングリア、コーラ、タバスが出てきたところで、私はそれぞれの進路を聞きました。母国に帰る人、引き続き他の国に留学する学生、コスタ・デル・ソルに残って仕事を探す人、スペイン人と結婚してマラガに永住することになった女子学生、等々、クラス仲間の人生は多様です。タケシもまだ勉強は続きますが、しばらく大学は休み、今後を考えることにしました。新聞やテレビ、街のスペイン語の実地勉強も大切ですが、それにスペインの地方やヨーロッパの国々も訪れたい。

「近い将来、キミたちの国を訪問することになるかもしれない。その時はヨロシクね」

「もちろん、もちろん。大歓迎だよ」

「日程が決まったら、メールで早く教えてネ」

皆から掛け声と拍手が起こりました。すでに帰国した友からも、その後の生活を綴ったメールが届いています。クラスは違うが、なかには、母国での兵役義務を合法的に免れるために留学している学生もいて、現代世界の歴史のひだを肌で感じたものでした。

それぞれの出身国の状況、文化的背景は異なっても、校内ではすべて楽しい仲間。いずれは母国で重要な立場で活躍する人も出るかもしれない。国境など全く意識しない友情の輪の広がり——これだけでも、定年留学の多大な収穫だったと確信しています。



「スペイン定年留学」の項はこれで終わります。原稿は左の拙著の中から引用・編集したものです。

清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。
東京都・昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>